



目次

●特集1>> 第23回研究会

講演会「短歌、横浜を詠む—釈迢空に関わりつつ」

* 02 講演会記録… 講師 國學院大學名誉教授・日本芸術院会員 岡野弘彦氏

●特集2>> 文学散歩・即詠歌会

野島公園

* 10 報告… 宮下俊博／池谷しげみ

* 12 会員著書紹介&新入会員自己紹介

会員著書紹介… 綿貫昭三／土屋美代子／鹿取未放

新入会員自己紹介… 鈴木理慧

* 14 会員作品

荒川とよ子／伊藤美枝／福原捷子／尾崎知子

岩井幸代／小寺敦子／小林 勝／窪田司郎

* 15 編集後記

特集1 第23回研究会

―岡野弘彦氏講演会「短歌、横浜を詠む―釈迢空に関わりつつ」

〔講師〕 岡野弘彦氏（國學院大學名誉教授、日本芸術院会員）
〔テーマ〕 短歌、横浜を詠む―釈迢空に関わりつつ
〔日時〕 2017年7月9日（日）13:00～14:45
〔会場〕 ナビオス横浜（横浜国際船員センター）（横浜市中区）
〔主催〕 横浜歌人会
〔後援〕 神奈川新聞社、県立神奈川近代文学館

■ 1 わが短歌との縁

岡野弘彦でございます。

ご紹介にあつたように、もう九十三という歳になりましたが、若い頃は、戦中派でありましたから、兵隊さんになって、戦場に行き、戦うことを子供心に言い聞かされて育ってきた世代であります。

こうした世代であつたうえに、私には、山奥の小さな村の神主の長男に生まれておりましたので、神主を継ぐことが予定されておりました。お前は三十五代を継ぐのだぞと当然のように両親は育てておりました。私の生まれた家は、そういう古風な家ですから、満一歳になった時に、周りにいろんなものをばらまいておいて、そして、這い這いさせて、最初に何を手に取るかによつて子どもの将来を占うわけです。父親が、「お前はためらわずに笏をもったんだよ。神主になると言うのはちゃんと生まれた時から神様が決めてらっしゃったんだ」と言っておりまして。そんなこと言われても、一歳では自意識などありませんから、たまたま笏を一番近いところにおいてたんだらうと思います。

自分もそのつもりでいましたけれども、やがて、村の小学校へあがりました。村まで三キロあるんです。しかも、それは山の奥の二つの谷が流れ下ってくる、ちよūdその真ん中の傾斜地を切り開いて神社を建てたわけでしょうね、古代にね。この通学はたいへんでしたけれども、体力はついたと思います。今はもう、この歳ですから駄目ですが、四十代、五十代の頃、学生たちを連れて飛鳥や吉野や紀伊、あるいは近江など「万葉旅行」と称して、年の暮れの、当時は現在と違って寒さが一入でしたが、一週間近くを歩きに歩き廻りました。朝早くから夕方遅くまで、多い時には一日四十キロ近くも歩きました。女子学生も多く参加しており、むしろ彼女たちの方が頑張つて万葉集ゆかりの地を歩きました。

話を戻しますが、私の神社の祀っているのは、仁徳天皇とそのお妃の磐之姫皇后だといわれていますけれども、どうも、私はそうではないと思っています。それは明治神道が自身に都合のいいように祭神なんかも入れ替えたりしたのでしょう。中学の頃古事記・日本書紀なんかを伊勢の皇學館で学んで、自己流に判断す

ると、どうしても仁徳天皇と磐之姫皇后は如何にも、典型的過ぎるのです。型通りなんですね。

家のお社は戦争になると、三重県下伊勢、伊賀、志摩など、殊に志摩の漁民たち、それから伊賀の忍者の末裔の人たちが来られる。忍者の百地家などは一族郎党を集めて参拝して来られる。だから神主の方も余程しっかりと腹を据えて御祈禱してあげないといけません。そういう神社に生まれました。で、日清戦争や日露戦争なんかになると、たいへんな参拝者が集まるわけです。そして鳥居が献納せられる。村から三キロの道を、傘を持たないで学校まで行けるくらいで、あの京都の伏見の稲荷神社の鳥居のようです。あのような赤い色は塗ってありませんが、白木のままですけれど、武運長久を願ってトンネルのように鳥居が続いていました。



講演中の岡野弘彦氏

この神社の祭神は、生意気にも中学生なりに推量して、速総別王と女鳥王、異母兄妹ですが、この二人に違いないと独断を致しました。

明治神道は国家神道ですから、仁徳天皇に背いたようなものを祭神にするとはけしからんと変更させたのだと思っています。残念ながら、何一つとして神社の社記も伝記も残っていません。かなり古くから信仰のあった神社であるはずなのに。また、藤堂家では非常に信仰が篤く、藤堂家の何代目かのお手植えの藤堂藤が、神社の境内に植わっています。おそらくは北畠家も当然信仰が篤かっただろうと思うのです。

神社は、大和と伊勢の境の山の中から、隣村は大和の御杖村という所で、倭姫命が天照大神の神霊を背負って、山を越え谷を渡って今の伊勢神宮に御霊を運んでこられた。その時におそらく、嶮しくて、杖が欲しくなり、杖をさしあげたというふうな伝説があつて、御杖村字神杖、名前を聞いただけでも厳かな感じがする、そういう地名がいまでも歴然と残っている。それが隣村なんです。そこから伊勢に一步入ると八幡村川上、雲出川の一番上流です。で、そういうところに生まれました。

皇學館は、やがて大学に昇格して山田孝雄先生が学長に來られてそこから文部省管轄下の学校になるんですけれども。それ以前は内務省管轄でした。日本で内務省管轄の専門学校というのは二つしかなくて、美術学校と皇學館だけだとよく聞かされていました。そのの中学部です。ですから文部省管轄下の学校のようなカリキュラムと全然違う。英語・数学は極端に少ない。その代わりに古事記・日本書紀から始まって、祝詞講義とか祝詞作文とか、神主さんの祝詞を、あれを自分で作らせる。そこから教え込まれるわけですね。それから祭式。二時間続けてきちつと莫座のうえで正座し

ます。初めは、終わったらしびれて歩けないのが、三年間それをやりますと、すいすいと足がきれいに運ぶようになります。そんな学校でありまして、一年生から五年生まで全寮主義です。だから、私は親の元に居たのは小学校だけで、あとはもう親元を離れてしまいました。

やがて、軍隊にとられ、それから帰って来て間もなく、憧れていた折口信夫先生のところへ参りました。先生主宰の「鳥船」という短歌結社があつて入りました。それから、硫黄島で戦死した折口春洋といつて、これは藤井春洋さんですけど、能登の氣多大社の中世の頃からの社家の藤井家の出身なんです。まあ私にとっては若い折口先生、年寄りの折口先生という感じがですが、予科に入ったときから伊勢物語をその若い折口先生から教えて貰い、さらに「作歌」の授業で短歌を作ることを教えていただきました。皇學館の中学部で、それから中学に入る前から両親から歌を作ること自然に教えられて育ったものですから、勝手にいろいろ古典の世界というものを感じ取ったり考えたりしていました。万葉集の「作者未詳の歌」の中にも、かなり、人麻呂の歌であるはずとか、人麻呂という人は、一人ではなく、複数の人麻呂が古代にはおそろくいただろうとか。個性のあるようなないような名前だから民謡として伝わっている中にも人麻呂が流布していった、人麻呂によつて流布せられた歌があるだろうとか思ったり考えたりして万葉集などを読んでいると、楽しいわけであります。

道の辺のいちしの花のいちしろく人皆知りぬ我が
恋妻は
(万葉集卷十一 二四八〇)

これはやはり「作者未詳の歌」ですが、「いちし」



穏やかに、そして確かに

は私の実家も三重県一志郡だったのです。その「いちし」の、道の辺のいちしの花、これがもうこの頃大体決定しました、というか、自然に一番多くの学者たちが道の傍らに灼然として、と解しております。「灼然」と言う漢字が書いてありましてそれを「イチシロク」と読ませている、それをいたどりの花だとか、しろい木の花だとかいうふうに古くから言われているのですが、段々と、違うだろうと言われ、実際にあのあたりを歩いてみると、赤い花が咲いていました。もう今では全部田の畔がコンクリートになって駄目ですが。明日香へでも行かなければ、あの花のあかあかとして、田の畔を埋めたような感じは見ることができません。私の所では田の畔に、冬から春にかけては何にもないので、春の初め頃に、すうっと葉が急に伸びてきて、青い軸がでてくる。そして、ぱあと線香花火が開いたように赤い花が咲きます。彼岸花です。私の子供の頃は、あの花が強烈に田の畔に咲いていたものです。まだ、明日香の村には同じような状態で咲いています。

「道の辺のいちしの花のいちしろく」。灼然と赤い色に強烈に咲いているその壺師の花それじゃないけれど、強烈に、「人皆知りぬ我が恋妻は」、実はそっとしておこうと思うわが胸の思いの恋妻、それはいつか人に悟られてしまった、あんなに秘めていたのに。

それと、この道の辺にいつのまにか湧き立つようにして咲き続くこの強烈な赤い花、似てるじゃないかというふうな思いでしょうね。

■ 2 心育む少年

私の神社の祭神の、仁徳天皇と磐之姫皇后というの

は、前にも述べましたが、いかにも教科書的なという感じがするわけです。仁徳天皇に背いてそして、秘かに逃れた、それは女鳥王が速総別王にすでに心を寄せていて、そして、「まんまとだまされてはいけません」というふうにして、速総別王を自分のほうへ引き寄せている。それを知った仁徳天皇が軍勢を以って、追いかけます。ひそかに二人は大和から伊勢に逃れてくる。ちょうど私の村のあたりが大和と伊勢の境です。で、雲出川のほとりの所で、もう一步で伊勢に入るといところで女鳥王は捕えられて殺されるわけです。それから速総別王はもう少し伊勢に入って、私の家の下から流れ出している雲出川の、中流のところの「いおき」というところ、今は家城といっていますが、そのあたりで殺されました。

ところが平安朝になると、不思議な神話・伝説が起こりまして、早太將軍とか千方將軍とかいうのが出て、むかし、大変強烈な地方的な勢力を持っていた伊勢の一誌の平野で勢いを奮っていた。しかし討伐の軍勢が差し向けられて、雲出川の上流まで逃れるもそこで殺されたという藤原千方伝説が澎湃として起こるわけです。伊勢の郷土学者のうちの、優れた見通しを持つておられた方、亡くなられましたが、その方の説では、速総別王・女鳥王の悲劇の伝えが平安朝に藤原千方伝説になってその怨念を伝える話を、あのあたりに流布したんだらうということで、なかなか魅力のある見解だと思っています。

古代の人というのは、そんなに単純に「ああ、だめだそうだ。朝廷に背いたら、そりゃいかんということだ」と簡単に決めたりしませんから。百年、三百年、五百年後にもその時の人達のころのなかに澎湃として息づいて来るといことは、日本人の詩の、伝説の、心理の中には脈々といきているわけで、歴史の表向き

の伝えばかりで考えていると日本人の本当の古い心理を捉え忘れてしまうこともあるわけです。そうでない場合ももちろんありますけれど、私は、そんなふうに子供の頃から考えておりました。

小学校に入る前から、母親が字を教えてくれました。そして、その頃、菊池寛の文藝春秋社から売り出していた小学生全集を全巻直接購読してくれた。それを持ち遠くって夢中になって読みました。その中には古事記神話というのが、第一巻にあるのですが、さらにギリシャ神話・ローマ神話が割合に早い巻にありました。そのほか、北欧の神話、それからいろいろなお伽話の本や創作童話など、全部で八十八巻だったと思います。それを、山の奥の一軒家ですから、周りは、父と母と、それから家には祖父の代から使っている女性達ですから、ひたすらそれらの本を読みました。

伊勢には伊勢神宮を中心にして御師^{おし}とか御師^{おんし}という制度がありました。それが明治神道ですっかり一掃せられるわけです。それ以前は、内宮の宇治橋の中にだって勢いのある御師の家があったわけです、そこで全国から来られる神宮への参拝者を、大事に二晩とか三晩とかお泊めして、神宮の内宮さん外宮さん、あるいは、主だった別宮なんかを拝んでゆきます。それだけじゃなく、近くに古市という色町がありまして、おかしいようですけれど、必ず大きな信仰力のあった神社仏閣の傍らには色町がありました。神や仏に祈りを奉げるまでは清浄を保って、ひたすら神と合体するような情熱を保っているわけです。一遍、神さんあるいは仏さんと心を通わせ合ったら、その後は開放するわけです。

私は小学校三年の時に大峰山という修験道の行場の山へ参りましたが、父親が隣村の大先達に「煮て食お

うと焼いて食おうと、息子の命預けます」と言っているのを聞き、こりゃあ大変なことになったと思いがらも、預けられるままに大峰山に登りました。

子供の脚というのは割合に軽やかで確かなものです。しかも、毎日往復少なくとも六キロの山道を小学校に通っていたわけですから。大峰山の御山へ行くまでの道などはたいしたことなかったのですが、その行場の雰囲気というのは非常に私の幼い心にも荘厳なものとして残りました。大層清々しい山上参りをいたしました。その後、中学生の時に二回ほど自発的に大峰山に登りました。まだその頃は「東の覗き」「西の覗き」というのが残っていて、襷に縄や綱をかけてくれて、大人三人くらいが関わって、岩の上からずつつつと下ろすんです。下を見るときもう大木がちょんちょんちよんちよんと盆栽みたいに見えるんです。最後にずつと下ろすと、「親に孝行しろよ。よう勉強せいよ」と言われて、「勉強するする」と言うとき引き上げてくれるわけです。

ところが東の覗きか西の覗きか、今では記憶が不確かですが、どちらかの方は綱を掛けてくれないのです。手で引つ張ってそれから足を三人がかりで引つ張ってくれるんですけど、山の上ですから雨が降ることもあるし、霧が巻いてくることもあって、びしょびしょになっているわけです。ずるつとすべって三年に一度くらい落ちることがある。私の時は両方の覗きをやらされました。しかし、戦後、進駐軍の男たちが登ってくるようになって、綱を掛けない方は危険だからと止めてしまいました。

なんか古風なおどろおどろしい体験じゃないかと言われるかもしれませんが、私ども子供の頃はそれが普通だと思っていました。

明治神道というのは、そういうものを綺麗に整理し

てしまいました。それは同時に、心の深い所の非常に大事な伝統的な信仰というものも、随分整理せられて断ち切られてしまった要素が多いわけです。

■ 3 短歌と折口信夫

ほんととは、短歌などもそういう心の奥行というものを自ずから言葉の上に、それから、何よりも、歌の調べの上に出てくるということが大事なんです。ところが、戦後七十年、言葉が全然違ってしまった。そして、子供たちの心理の中にもそういう百年前二百年前あたりまで、延々として日本人の心の奥深い所に流れていた、非常に大事な部分が変わってしまいました。口語短歌は格好よいけれど、意味がすぐに分かるから単純で、奥行がなく、陰翳がないのです。

この話題は限りがないから、別の話にします。

先に申しましたような家庭に育ちましたから、古典を強烈に叩き込まれました。その中で、特に皆さんに披露しておこうと思うことがありまして、本居家の先祖代々の墓は、伊勢の松坂の町の中にある大きな樹敬寺という寺にあり、このお寺も宣長さんは非常に大事にしたお寺であって、そこで、源氏物語の講義とか月々の歌会をやって、丹念に歌を作っておりました。

あの人は本当に熱心な人でした。その歌は明治以降の国文学者達が下手だと評価を下していますが、丹念にみると、殊に最後の歌『枕の山』という三百首ほどの、亡くなる半年くらい前から夜ごとに枕に頭を横たえると、桜のイメージが起こってくる、桜の歌を三百首も死ぬまでに詠んだわけです。この『枕の山』というのは宣長の歌集の中で一番いい歌集です。その中の数首はなかなかいい歌があるわけです。その宣長さん

が大事にし、講義をしていたお寺、それが、私の叔父、父親の弟ですが、その方丈さんになっていました。今は代がかわっております。

それから、父の兄は、これはあの皇學館の専門部本科を出て、伊勢神宮の禰宜にまでなっています。伯父は、石川県羽咋市の氣多大社の宮司になって何年かいたわけです。

不思議なことに、私は戦後の昭和二十二年に折口信夫先生から家に来ないかと言われ、その四月に内弟子になりましたが、先生が私に声をかけられたのは、先生の養子になられて硫黄島で戦死した旧姓藤井春洋先生の実家が氣多大社の社家で、折口先生のご存じの氣多大社ゆえかと思っていました。しかし、事實は違っておりました。「えっ！君がああ、…」と私の伯父の名前を言って、「あの宮司さんの甥なのか」と言っているのを聞いておられ、「不思議な縁だね」と言っておられた。

春洋さんが國學院大學の予科に入学して、それ以後、折口先生と藤井家との縁が出来て、夏休みなどによく羽咋に来るようになった。その頃に伯父が宮司をしていたわけで、伯父は何枚か折口先生の色紙・短冊を持ってました。そして、伯父は、あれは凄い先生だということを知った初めから言っておりました。

私は六つになった時、父親に連れられて伯父のいるあの氣多大社の官舎で一週間ほど滞在しました。夏の休みの時でしたから、折口先生に会っているかもしれない。私の記憶では、初めて海を見、カレイが何かを踏んで気持ち悪くてひっくり返って潮水をうんと飲んで泣いた記憶があります。多分、折口先生とすれ違ったりしているだろうと思っています。人間の縁というものは、そんな記憶のない所から不思議に始まったりするものですね。

■ 4 短歌の力

折口信夫という人の歌は、「アララギ」のように、新しい時代の新しい写真の歌というふうな形で起こってきたのとは異なるわけです。伝統的な、長い古典からの読み取りの深さが違います。「アララギ」の人にも斎藤茂吉以下の勉強家の人たちは、一生懸命古典を読みましたが、深さが違います。書いたものや歌の調べを見ていきますと、知識として取り入れているのと、古典の中の魂を自分のものにして思うと違って古典を読むのでは、歌の調べや、言葉の響きが違ってくるものです。声に出して読めば分かることです。茂吉にだって、良い歌があります。しかし、折口信夫の歌の調べは、やはり非常に不思議な古風な力があります。古風な言葉の持つている響きと意味と、そうしたものの総合せられた力が短歌の形にまとまってきて、一層発揮せられてくるわけです。

その折口信夫という人は大阪の商家の出身です。折口信夫が若い頃から非常に憧れた、柳田国男先生の学問には、日本民族の古くからの現代に至るまでの習慣の中にある深い心や言葉の在り様を研究していく学問です。いわゆる「民俗学」です。柳田先生は折口先生より十二歳年上でした。この学問の力が逍空短歌に良い意味で関わっていると思います。

國學院も皇學館も戦後は全然「作歌」の時間を忘れてしまいました。私は時々頼まれて皇學館に行きますが、その度に「せめて神主さんになる神道科の学生たちには歌を作らせなさいよ。歌すら作れない神主さんの作る祝詞なんて全然神様は耳傾けてくれませんよ」と、ちよっときつく言うんですが、この頃は商売繁盛とか交通安全とか新しいことばかりになって、新しい言葉で言うような祝詞で間に合わせている神主さんが

多くなってきた、さぞや神様も耳を塞いでいると思います。神主のことになると、意固地になって、厳しいことを口にしてしまいます。

折口先生がやはり神主さんには厳しかったです。その代り、世襲の何十代が続いた神主の家の若者を大事にしてくれました。春洋さん、出雲大社の千家さんの一番本家の千家経麻呂さんも自分の膝元において教育した期間がありました。あるいは愛知県の津島神社の大宮司家も大事に考えていましたが、こちらは娘さんしかいなかったもので、先生はがっかりしていましたけれども、とにかく世襲の神主の家を心にかけておられました。

折口先生は不思議な子どもだったようです。幼い頃から、自然に歌を暗記してしまう。また自分で歌を幼いなりにつぶやいたりする。中学生になると、中学生が読まないような古典をどんどん読んでしまいます。大阪一番の名門校である天王寺中学ですから、図書館には多くの蔵書があり、『令義解』なども読み、辞書は該当項目を引くのではなく片っ端から読んでしまうわけです。

■ 5 逍空短歌と横浜―「嬢子塾」の神髓

折口信夫は、短歌もそれからまた詩も小説までも書きました。『死者の書』と言うユニークな小説まで書いたわけですが、そういう広い多様な才能の持ち主であつたわけです。その折口信夫が晩年に詠んでいたのが今日見る「嬢子塾」と言う作品ですね。

歌に入る前に、大方時間済んじやったんじゃないかと思われるでしょうけれども、実は、そういうことを知った上で、折口信夫の歌を鑑賞していただくことが大

事です。そういうものを抜いてしまつて字面だけ見ていたってそれは折口信夫が命を込めた言葉の、ほんの上面だけに通り過ぎたということに過ぎないかもしれない。皆さんの力そのものが示されるわけです。

あの頃、戦後というのは、非常に短歌が圧殺されようとし、圧殺された時代です。伝統文化を支えようとした方が息が上がらなかったですね。「アララギ」の斎藤茂吉なんか折口信夫よりも年上ですから、だんだんと弱ってこられる。あるいは「アララギ」の大事な歌人の中にぼつぼつと亡くなつていつてしまわれる。

そういう中で、晩年の作品というものにある、短歌そのものの持つ表現力、それを、戦後の、割合に若い年齢の歌人たち、宮柊二とか、近藤芳美とか、ですが、戦争にも、皆さんのように長く取られたり、近藤さんはそう長くなかったけど、やはり、万葉集を手旗にして送つていふという魅力的な歌があります。そうした作品を詠む年齢の人たちや、ちよつと年は寄つていますが山本友一とかいう人とか、そういう歌人たちに折口信夫を加えて、今、短歌というのは我々日本人の新しい時代の新しい心を託するのに期待の持てる文学ではない。という論がしきりに起こつていたりする中で、雑誌「新潮」が今の歌人の作品を誌面に出そうではないか、という評価を得られるのか見ようではないかということになって、そういう編集企画が現実に移されたわけですね。ま、その中では釈道空（折口信夫）が一番年齢が上でありました。

総合雑誌の「新潮」の企画に、世間が割合に注目したわけです。短歌だけの雑誌ではなく、あるいは結社雑誌とはさらに違った、短歌を広い場で鑑賞し評価しようという企画です。後に何人かが批評を書きましたが、その中で、やはり道空のこの作品、「嬢子塾」が

一番、やはり歌が本当に価値があるというなら、この作品だ、この作品に注目すべきだというふうに批評せられたわけです。

折口はなんとも横浜が好きで、例えば学年末などになつて卒業論文とかたくさんの担当科目のレポートが提出されてくるのを、雨戸も開けずに籠つて採点します。そういう時は全部私が玄関で「今日は先生は旅をしていますから留守でございます」と言つて来客を断るわけです。先生はその暗い家の中で電灯を付けて百冊くらいの卒業論文や五、六科目の試験レポートを読んでゐるわけです。私の仕事は大して難しいことではなく、機械のように「先生は今日は留守でございます」「旅行でございます」「あの人は一遍出るとどこつてあまり計画どおりに動かない人ですからよく分かりません」と言つてみんな帰つてもらふわけです。「ご苦労だねえ」とか先生に慰められたりしてゐるわけです。それで、一週間くらい籠つて読んでしまい、評価をつけてしまふわけです。

「終わった！ 横浜へ行こう」ということになつて、その頃、南京町といったのですが、「南京町に行つて、たらふく食べようよ」。あの人は食べるのが大好きで、一つはそれで命を縮められたところもあるだろうと思うのですが。料理好きなんです。先生の家にいると料理がうまくなければならないので、私なども今は一人で暮らしていますけれど、ちつとも不自由じゃない。全部自分で出来ますから。

「嬢子塾」という題が魅力がありますね。何か古典の中にこういうのが、万葉集にもあつたような気がするようなクラシックであつてしかも新しいところがあります。

すぎこしのいはひの夜更け、ひしぐと畳に踏み



夏の午後、たくさんの方が集まってくれました

ぬ。母の踝^{クルシ}

父母の家にかけりて被^カく衣^キ つゞり刺したり。父母の如

一首目などはいいですよね。あのキリスト教の過ぎ越し祝い、その過ぎ越し祝いの夜更け、「ひしぐ」と置に踏みぬ。母の踝^{クルシ}。十分にいきなり内容が判るわけではない。細かいディテールが判るわけではない。しかし、なんか不思議に心惹かれるものがあって、その二首が序歌のような形でまず、前に出している。

この時は、さすがに、先生やはり、そういう「新潮」の計画の意図を判って、一遍、私と一緒に歩いたんです。そして、なんか考えてたんですが、もう一つ気持ちが盛り上がってこなかったんでしようね。それから四五日経ってから「今日は僕一人で行ってくるよ」と言って、一人で出かけて、横浜の「港の見える丘公園」から「外人墓地」のあたり、それから降りて来て、その頃、海草の煮たような、ちよつと普通だったら食べられない物など食べさせてくれるレストランがあって、先生は懐かしがってよく入ったんです。もうその頃は食べる物がなかったから、そういう代用品で。おそらくそういう所に入って、先生一人で空きつ腹を満たして帰ってきただろうと思います。

その頃、あのあたりは外人の将校たちが接収していて、全然違った夢のような世界なんです。殊に夜になると、煌々と灯りがついて、日本人の家庭は灯りも制限せられていて暗いのに煌々としている。そして暖房もよく効いている。

その、「港の見える丘公園」あたりで、おそらくこういう構想が立ったのだらうと思います。この背景になる何かの事実がありそうですが、私は、ほとんどフィクションだと思います。この連作に付された詞書を

引いておきます。

をとめありき。野毛の山に家ありて、山を家として、日々出で遊びき。

血を吐きて臥し、つひに父母のふる国に還ることなかりき。稀々は、外人墓地の片隅に、其の石ぶみを見ることありき。いしぶみは、いと小さくでありき。さて後、天火人火頻りに臻りし横浜の丘に、亡ぶることなく、をとめの墓は残りき

亡くなってその石碑が立っているのを見ることがあった。非常に惨いあの戦争、その少し前か初期の頃にこういう哀れなことがあったという、なんか古事記の中か、風土記の中にでも出てきそうな話と心の底の方で通っているような感じでした。しかし、場面は非常に新しい、横浜の最近のというか戦争の始まろうとする頃、ちよつと前の頃のことだなあと感じます。

この詞書が、まずある。そしてこういう詞書の事柄と、その後の人間の心の在り様というものが読者の心の中に彷彿として浮かび上がってくるのです。それを踏まえて、

たゞ暫し まどろみ覚むるかそけさは、若きその日の悲しみの如

青芝に 白き躑躅の散りまじり 時すぎしかな。

こゝに思へば

山ぎはの外人墓地は、青空に茜匂へり。のぼり来ぬれば

くれなゐの 野櫓^{シドリミ}の花のこぼれしを 人に語らば、かなしみなむか

日本の浪の音する静かなる日に あひしよと 言ひけるものを

我つひに遂げざりしかな。青空は、夕かげ深き大海の色

赤々と はためき光る大旗――。山下町の空は昏るれど

○ ひろくくと荒草立てる叢に 入り来てまどろ。時立ちにけり

こういう形で、叙事的な、そして悲劇的な一人の少女の儚く短い命、それを思っている人の心というものが叙景と共に歌われているわけです。これが、「新潮」が出てから、今、短歌というものが、戦後のこの時代の中で、短歌は第二芸術だとか、もう短歌なんか、今出る幕ではないとか、いろんな辛い批評が横行している中で、やはりこの作品は力があるではないか、大事な、我々の心の奥の思いというふうなものが湧き上がったところがあるのではないかと、いろいろ批評家たちが評価したわけです。

この頃は、斎藤茂吉さんなどもあんまり元気がなかった頃です。だから、この「嬢子塋」というのは、私どもの心にある刺激と感動と、そして短歌に対する愛情と勇気を湧き起こさせてくれました。こうした刺激があるから、私も細々ながら自分の歌集を出し続けてきたし、今でも歌だけはとにかく作り続けてゆこうと思っています、作っているわけです。

■ 6 今、作歌すること

ちょうどこの同じ時に「短歌」編集部から、もういま世界の情勢を見ていてほんとに人類の最後が来たような感じがするが、一体戦争をどうしたら停められる



会場のナビオス横浜（横浜国際船員センター）は汽車道の向こう

のか、そのことを歌人たちに書いてほしい、それを三十枚書くのか四十枚書くのかと想っていたら四百字で言うのです。この大きな問題を四百字では、思いの丈の言葉のエッセンス、言葉を凝縮させることにはなるけれども、三十一首の巻頭作ともども読んでもらえれば、大体私が何を考えているかは判ると思います。

やはり文学というものをほんとに真剣に創作している我々は、大変な、当面の大きな問題だと思っています。文学なんかと関係のない、もっと優美なものが短歌だと言う人は幸福ですが、私にはそれに安んじることができません。こういう時に折口信夫という人がいて、力ある言葉を、長い伝統を見据えて、あの人のすごい直観力から絞り出して言ってくれればと思うけれども……。

作品というのは勿論フィクションが入ることも部分としては必要です。しかしフィクションの部分にも体験を持ったものと、そして全く体験なしで虚構の形だけで作ってきたものとは自ずから違うところがあります。殊にこんな短詩形の文学では、そういう点がはっきりしてくるだろうと思います。「ご苦労だね。もう休んでもいいよ」と折口先生がそう言ってくれるといいなあ、と思いますけれども、なかなか先生の声は聞こえてこない。しょうがないからとぼとぼと作り続けております。

何か脚の痛いのも忘れて、立ったまましゃべってしまいました。ごめんなさい。僕自身にもごめんなさいを言っておきます。
ではこれで。

*会報バックナンバーのご案内

▼第116号（二〇一七年五月二十日発行）

観月会報告…新田由美子／渡辺礼比子／鹿取未放
新春歌会報告…福原捷子／中村規子／俵谷晴子
新入会員自己紹介…高橋律子／千田政子

会員作品…深志聖子／松井芳子／渡部洋児／結城千賀子／堀部知子／渡辺 謙／平尾 眞／宮下俊博

▼第115号（二〇一六年十二月十五日発行）

第22回研究会 中野幸一氏講演会「源氏物語のこ
とばと表現―源氏物語の訳を終えて」

文学散歩・即詠歌会報告…河北笑子／塚田キヌエ
会員作品…桜井健司／大橋 弘／半澤敏子／小寺敦子／小南紀子／窪田司郎／後藤恵市／山本登志枝

▼第114号（二〇一六年四月二十日発行）

新代表委員・副代表委員・運営委員挨拶
角宮悦子さん追悼…高橋みずほ

研究会報告Ⅱ篠笛を聞く…川井怜子／小島熱子／三枝むつみ／中村泰子
新春歌会報告…藤田絹子／竹内芳恵

会報のバックナンバーは、横浜歌人会のホームページからダウンロードできます。
ぜひご覧ください。
<http://yokohama-kk.artcoocan.jp/>

特集2 文学散歩・即詠歌会

― 野島公園

〔日時〕 2017年5月19日（金）
文学散歩：10:00～12:00
即詠歌会：13:30～16:00
〔歌会会場〕 野島青少年研修センター（横浜市金沢区）

今回は横浜市の最南部にある平潟湾の入口に浮かぶ野島にある野島公園を散歩しました。野島は「金沢八景」のひとつ「野島夕照^{のしまのせきしょう}」で知られています。

● 報告 ― 歴史と緑の中に 宮下俊博

野島公園駅前の野島橋を渡り、歌川広重の描いた「野島夕照」の地へと入る。左手に釣宿の漁船が何艘か朝陽の中に浮かんでいる。松葉ボタンのような茎を隠して艶やかなピンクの花がびっしりと咲き誇る住宅街を抜け、「旧伊藤博文金沢別邸」に着く。台所棟・客間棟・居間棟が公開されている。客間の「帰帆の間」からは正面に八景島シーパラダイス、左手に海の公園を見ることができる。目の前には、松が植えられ多くの灯籠が並び玉垣が設けられていた。博文公は、この灯籠の灯りを目印にして船で来邸していたと言われているそうだ。また、客用便所は本塗仕上の木製大便器・小便器である。生活の場の、湯殿はサワラ材の木製箱風呂で湿気が必要ということで水拭き掃除をされていた。また、水屋には人造石研ぎ出し仕上の竈・立ち流しと当時の様子がうかがわれた。

その後は、各自、野島公園内を即詠会にむけ歌をひねりながら自由散策。私は海の側から別邸を見た後、展望台へと向かった。木洩れ日の射す緑陰を心地良い風に吹かれながら歩いて行く。鳶の鳴き声がすぐ近く

に聞こえ、一緒に登っている気分だ。海拔57mの眺めはパノラマ。海の方だけでなく陸の方も丹沢や富士山を遠望できる。先程まで目線位の所を飛び交っていた燕はいなくなり、鳶は舞いながら青空にとけ込んでいる。

昼食後、青少年研修センターで歌会。提出歌全十五首は、〈別邸〉七首、〈風景〉三首、〈野島での気持ち〉〈動植物〉各二首、〈戦時の遺構〉一首という内訳だった。表面が平らかでないガラス窓をとおして見えるシーパラダイス、置物や設備、目に映る風景、思



野島の風景

いの込め方など、一首につき二人ずつ評したのち、自由に感想を述べ合った。即詠会の参加者以外の方にも歌意をわかってもらうにはどうすれば良いかなど、難しい課題も出された。帰り路も違う結社の方と短歌についていろいろ語りながら歩き、駅へと向かった。

●報告——春の文学散歩レポート 池谷しげみ

五月十九日、金沢区の野島公園を散策。その一角にある伊藤博文記念館を見学し、そのち、野島山展望台にのぼるなど、文学散歩と即詠会を楽しんだ。

朝から、初夏を思わせる日が射す、緑の眩しさのなか、金沢シーサイドラインの野島公園駅を出発。総勢十五人のこじんまりとした一団は、潮風のさわやかに包まれながら海沿いを歩いた。

ひさしぶりの顔ぶれもあり、新入会員の方もいて、早速おしゃべりに花が咲き、迷子にならないように歩をすすめて、伊藤博文記念館に向かった。

庭がそのまま海に面している博文邸は初代内閣総理大臣である伊藤博文が明治三十一年に金沢別邸として建てたもので、平成十九年におおきく復元工事がなされ、現在も藁ぶき屋根が受け継がれるなど、当時の姿をそのまま残している。

明治憲法の草案を練った場所としても知られ、当時の政界のさまざまなメンバーが訪れて、東京からはなれた静かなこの場所で国の運営のための発案や議論が交わされたところでもある。

けっして大きすぎず、心休まる雰囲気を持った建物は、むかしながらのガラス戸にも味わいがある。当時の写真、博文の書、家系図の詳細などをじっくりと見学した。庭の一角には牡丹園も広がっていた。

その後、野島山展望台にのぼるため、木々にかこま

れた坂道を木漏れ日を踏みしめながら歩くと、一挙に小高い場所に出る。

三百六十度ひらけた所にこぶりの展望台。「むこうが千葉の木更津」という声にみちびかれて眺めると、煙突の群れがみえる。東京湾の出口にちかい、かなたの海まで一望できてすがすがしい気分になる。そしてなにより空気がおいしい。

ひとしきり眺め終わると、みな一斉に寡黙になってメモをだし、提出するべき一首の構想をねりはじめた。午後の部の歌会を思いうかべると、だれもが空腹感も忘れてしまうようだった。

詠草

・晩春の咲きのこりたる芍薬に潮風ふきてはつかに揺るる
後藤恵市

・ゆがみたるガラスのむこうに海が見ゆ島より迫り出す銀の遊具も
野一色容子

・野島山展望台にただ在りぬ五月の風に吹かれ惚けて
小島熱子

・「帰帆の間」のガラス戸越しにうねりたるシーパラダイスの銀白の屋根
宮下俊博

・海の光及べるなかの真鶴の剥製とほき時間をまといふ
山本登志枝

・掩体壕野島の山を貫くと使はざるまま鉄扉を閉ざす
藤田絹子

・彼方には君津のエントツあざやかに光れる海にすくつと立てり
塚田キヌエ

・なんとなく右の小指の痒き日に野島まで来て空を見
てゐる
杉下幹雄

・何ごともなきかのごとく銀色の漁船は尾をひく平和
を祈り
千田正子

・海風は博文公の別邸を吹きぬけゆらず掛軸の牡丹
田代弥生

・さわらの木の大き湯舟に博文は暗殺近づく身を沈め
たり
池谷しげみ

・二枚折りの春畝先生の屏風みてへやは古びし書院に
居りぬ
伊藤宏見

・野島橋橋詰に泊るあさなぎ丸甲板洗ふ水に輝やく
工藤こずゑ

・博文の旧居の廊下灯しあるLEDの光やさしき
箕浦 勤

・岩壁にその身晒して見守れり磯鴨いそひよの雄は干潟の雌を
真鍋正男

[写真]

> 真鍋正男：P10-P11

> Atelier UN：P3-P8



歌会の様子（司会は野一色容子さん）

■ 会員著書紹介 & 新入会員自己紹介

■ 会員著書紹介 —

・綿貫昭三写真歌集『うぶすなの地（冬から春へ）』

私の手作りの写真歌集は平成二十四年に第一集を発行しましたが、その後五年をかけて今回第九集を発行することができました。

齢をとると先祖がえりをするというのでしょうか、改めて、生まれ育った神奈川県や横浜の町が懐かしく、第九集ではうぶすなの地として六十二頁の写真の中に百二首の歌を詠み込み一冊に纏めました。

写真は、昭和中期の頃のモノクロームのものを数枚加え懐かしさを演出してみました。

「自選十首」

- ・懐かしきものに逢はんと一念を持ちて巡りぬ産土の地を
- ・終戦の駅舎の写真張りありて懐かしさ悲しさこどもに來つ
- ・五十年タイムスリップして見れば旧き農家でありしわが家
- ・地場野菜売りてわが子を育て上げ旅立ちしたる母といふ女ひと
- ・勉学の夢断ち切りて勤めたる夜の製油所忘れ難しも

・わが町の古き家家毀たれて建ち上がりたる老人の家
・茜色に染まりたる空見上ぐれば呼応するかに窓の灯点る

・客なれば薄きに触れず刈り上げて慎み深し町の床屋は

・酒に負けたお調子者のわが口よまたも流すか人の噂を

・簡淨のとげとげばかりとなりてより孤高なり冬のブーゲンビリア

・土屋美代子歌集『山帰来』

本集『山帰来』は、私の第一歌集です。短歌を詠みはじめたのは全くの偶然からであった。常々社会との繋がりを持ち続けたいと考え、また主婦が活動を続けるためには家から近いことが必須だとも思い横浜の南はずれに住む私は、横須賀の点訳ボランティアに参加していた。そこでコスモス短歌会の葛原繁氏が講師をされている初心者のための短歌教室に出会った。これが歌を詠むようになったきっかけである。たまたま宮柊二先生が選者の日経歌壇を愛読していたので不思議なご縁と親しみを感じ勉強することにした。ともかく一首が五句三十一音に纏まったときの喜びは忘れられ

ない。次第に面白くなりコスモス短歌会へ入会した。こうして日常の身辺や家族、友人との旅行などの感慨や発見を詠みつつ歳月を経た。そして作品が貯まっていた。歌集を出したいなあと思うようになり、平穩な時に歌集を出すことにしたのである。おおかたは「コスモス」「きらら（神奈川支部報）」に掲載された作品である。

選歌は、カルチャー教室でご指導いただいている高野公彦氏にお願いした。お力を戴いて出来上がった『山帰来』です。八十歳を目の前にした現在、私のこの居場所である歌をこれからどう詠んだらいいのか。加齢と共に衰えていく感性や視野をどう保ち、育て、拡張、更に磨いていったらよいか。この大きな宿題を抱えて短歌を愉しみ、そして苦しみ、歌を学んで行きたい。

「自選十首」

- ・さくらばな咲きしづもりて高枝の鳥の古巢をはんなり裏む
- ・点筆がタイプに遷り現在はパソコン使ふわれの点訳
- ・この家の梁も柱も聞きをらむ全身で泣くみどりこの声
- ・空を飛ぶ鳥の臓器の中を経て庭に芽吹けり山帰来の実
- ・愚痴いへば夫のこたへがまつたうでストレス更に積りゆくなり
- ・うちつづく暑をしのがむと冬瓜の面取りをして水晶煮つくる
- ・ありし日の父を倣のみひて御酒供ふこれから伐らむ庭木の黄楊に
- ・さへぎる物なんにも無くて閑上ゆりあけの荒野あらののはてに蔵王は白し

・地球照のおぼろなる円抱きつつわが谷戸に光る冬の
織月オリヅキ

・母のせし仕草を想ひ膝の上で手のしをしつつTシャツたむ

●鹿取未放第三歌集『かもめ』

長い間、故郷である京都に帰りたいと思っていた。そもそも横浜に住むのは本意ではなかった。働かないといけなくなつて、東京都・千葉県・神奈川県の三箇所に臨時教員の書類を出した。いちばん初めに話が来たのが神奈川で、その頃「心の花」の石川一成さんが教育委員会にいらした。縁があつたのだろう、あれから三〇年以上が経つ。

『かもめ』という歌集名を考えたとき、全く意識にのぼっていなかったが、横浜を受け入れた証しかもしれないと後から思いついた。横浜プリンスの近くに住んで根岸の海を眺めて暮らした数年があつたが、懐かしくなつて時々海の匂いを嗅ぎに行く。半日かもめを眺めて飽きることがない。

これも「あとがき」には書いていないが、チェーホフの「かもめ」も視野にあつただろう。「かもめ」はことばとの葛藤の物語だ。歌集を出してみてもあの主人公ほど真剣にことばと格闘していない自分に対して反省しきりである。

「自選十首」

- ・あかね、どくだみ、をかとらのをに糸染める久方の天羽あもろさんの一生
- ・受胎告ぐるどの天使も羽たくましくひざまづくとは支配に似たり
- ・学会へ行きて戻りてさらに行く子に見えない領巾ひれを

ただ振つてゐる

・締め切り日は〈世界終末〉の後にありテーブルのうへに卵が一つ

・ポワンカレの紐、スタヴローギンの紐絡まりてあまつみそらに今宵はをどる

・耳のひと佐太郎讀へ蛇崩じやづくれをゆけどさくらの咲く音しづか

・「判決等即報用手持幡」(びろーん)を出す役ありてダツシユするひと

・ニルギリに昇る満月を見たくはないか、と説得されてネパールに來た。ニルギリは七〇六一メートルの処女峰

・待ち待ちて見つめてをればニルギリは鞍部よりそと月を産みたり

A、C、G、TはDNAの構成単位

・A、C、G、T A、C、G、T わたくしはわたくしである空があをいよ

・A、C、G、T A、C、G、T かもめはかもめ空があをいよ

■新入会員自己紹介——

●鈴木理慧自己紹介

私は小学六年生の時、少女雑誌の読者文芸欄の詩の部門で二位に入選致しました。

選者は西条八十氏で「雨」という題で、葉書一枚に綴った詩でした。賞品に花の絵が描かれた女性用の万年筆を頂きました。

鉛筆とちがい、スーとした柔らかな書き味が気に入って、以後は詩や日記を書くのがとても楽しみになりました。読書も好きで、母の婦人雑誌の短歌や文章の欄を必ず読み、その感想を日記に綴っております

た。

二人の子が高校生と中学生になり、時間に少し余裕ができた頃、『昭和萬葉集』二十巻を夢中で読みふけりました。昭和の歴史をさまざまな視点から詠まれた膨大な歌集でした。

フィクションで構成された小説とは異なる短歌は、私の心に強い感動と深い美学を教えてくれました。

昭和が終わり、平成の御代となり、私は「心の花」の会員になりました。夏には全国大会に参加して、宮崎、大阪、名古屋などへ出かけ、その地で短歌の勉強をした後、観光を楽しみ、短歌を詠んでおりました。そうしているうちに、二十九年の歳月が過ぎました。その折折に詠んだ作品を、歌集として三冊出版致しました。

五十一歳で夫の急逝という大きな試練を受けましたが、短歌を心の支えとして、踏ん張ることができました。

多くの歌友の方々と親交を深めて参りました。短歌は私の最良の友、最強の友でございます。

*横浜歌人会ホームページのご案内

横浜歌人会のホームページでは、会の紹介や催し物の報告など、いろいろな情報を掲載しています。

また、会報のバックナンバーもダウンロードできます。

URLは次の通りです。ぜひアクセスしてください。

<http://yokohama-kk.art.cocan.jp/>

■ 会員作品

● 福原捷子

空港のデッキに行くとき携帯がオスプレイ落つの
ニュースを流す
高架橋の下を流るる車みゆ　きのう免許を返納し
たり
一茶の句思いださせて大きはえ障子の棧に足をす
りいる

● 小寺敦子

カラフルな水陸両用バス潜る万国橋を久に渡りぬ
あの頃はよく見かけたるメリーさん憶いつつ行く
秋の馬車道
舗装路の割れ目に秋の猫じゃらし通りすがりの人
を恋うなり

● 荒川とよ子

夕風に淡き香りの稲の花遠き日の思慕よみがへり
来る

● 尾崎知子

広島路面電車のステップは膝までありぬ
四十二年ぶり
ござと偏の書き順ちがふと男子いふ同窓会に「隅
井」と書けば
高校時代に妹背の滝へサイクリング六人のうち女
子のみ覚ゆ

● 小林　勝

猫を追ひ白鼻心逐ふ焼きもののシェパードのある
畑土灼くる
沈む日といへども白く庭に射し桔梗きぢかうの花その色な
らず
資源ごみ置きて戻ればかく汗にひと粒の滋味梅塩
あめの

● 伊藤美枝

立ちっ放し水も飲まずに約二時間講演なさる岡野
弘彦先生
抑揚をつけて読まれる先生の御声九十三歳と思え
ず
講演の終りて帰る汽車道に陽はまだ高く照りてお
りけり

● 岩井幸代

日盛りを朱のアーチなす豆の花かなたの浅間濃き
藍に輝る
緑陰の画廊の奥のフジタの絵もの憂げな瞳めの美女
に会へり
老後には戸建てそれともマンションか悩むわが前
靖あきつ蛉きらめく

● 窪田司郎

秋暑き坂のぼりきて草に寄り汗鎮まれば心しづま
る
小波立ち小波それぞれ光りつつ運河はここに二別ふた
れゆく
電車ゆく響きに揺れて橋脚のめぐりは白く水の騒
立つ

編集後記

・本年の文学散歩・即詠歌会は平成29年5月19日に野島公園にて開催されました。詠草参加は15名でした。

・本年の研究会は平成29年7月9日にナジオス横浜にて開催されました。参加者は56名と大盛会で、岡野弘彦・國學院大學名誉教授の講演を聞きました。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首と説明文(23字×28行)を左記事務局(編集人)あてお送りください。会報に掲載させていただきます。

・会員の皆様で、当会報について、ご意見・ご希望のある方は、左記事務局(編集人)あてご連絡ください。
(K・G)

横浜歌人会会報第一一七号

発行日 二〇一七年十二月二十五日

編集人 後藤 恵市

発行人 吉野 裕之

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

振替口座 00230-0-52137 (名義 横浜歌人会)

制作 アトリエ云／印刷 啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。

